

総力戦と短い 20 世紀

クリストファー・コーカー

1945 年夏の日の 8 時 15 分、29 才の山口彊は広島海軍工廠に向かって歩いていた。そこで彼は、三菱重工の油槽船を設計する製図工として働いていた。そこでの彼の 3 ヶ月間の臨時配置転換は、アメリカが最初の原子爆弾を投下した日の午前中までであった。爆撃機はパイロットの母親の名前に因んでエノラゲイと名付けられ、リトルボーイという愛称のお腹の赤ん坊は、40 トン以上もの重さがあった。その赤ん坊が 1 分間で地表に到達して爆発すると、瞬く間に、火球はキノコ雲に膨張した。1 マイル離れた家屋は、輻射熱により自然発火した。

山口は爆風になぎ倒され、鼓膜も破れ、一時的に視力を失い、ひどい火傷を負った。死者の大多数は、核爆発による閃光熱傷によって命を失った。傷を負い、周囲の惨状から沸き起こる恐怖によるめきながら、山口は、広島から歩いて、2 日かかって、自宅に逃げ帰った。長崎に到着するや、彼はそこで第 2 の原爆攻撃を経験することになったが、この攻撃にも生き延び、翌日には律儀にも仕事に復帰した。彼の幸運は第一に、兵役免除職に就いていたため徴兵を免れ、太平洋の激戦場で名も知れない犠牲者にならずに済んだことである。そして、第二に、人類史上わずか 2 回しかない原爆攻撃に遭遇して、1 度ならず 2 度までも生き延びたことである。驚くべきことに、ほかにも約 100 人が同じ苦境を味わったが、両都市の被爆者、すなわち原子爆弾の犠牲者として公式に登録されたのは、山口唯一人であった。彼は長寿を全うし、2010 年 1 月に亡くなった。

1945 年 8 月の数日間に、山口は自分がテオドル・アドルノ (Theodor Adorno) (当時、アメリカに亡命していた) が「歴史という地獄のような装置」と呼んだものの犠牲者となったことを知った¹。たどった道筋は異なるが、両者は共に歴史の犠牲者であった。アドルノは第三帝国からの亡命者であり、爆撃を受けない安全な場所で暮らしていた。山口は市民権を保持したが、最悪の爆撃の被害者となった。両者の人生は歴史のリズムの中で相関するものとなった。20 世紀に作家ミラン・クンデラ (Milan Kundera) は書いている。人類は「丸ごと歴史に食べられた」(見事な表現である)。そもそも人間は外側から形作られる²。19 世紀の小説家を魅了した人間内部の変化——人間のキャラクターの心理に対する興味——は、戦争を含む外界の事象が人間のキャラクターに良かれ悪しかれ影響を及ぼす、その及ぼし方に対する興味に取って代わられた。歴史から逃れる

¹ Stefan Muller-Doochm, *Adorno: A Biography* (Cambridge: Polity, 2009), p. 304 からの引用。

² Milan Kundera, *Encounter: Essays* (London: Faber and Faber, 2010), p. 54.

ことはできない。すなわち、自分の居場所から逃げたり、そこにとどまったりすることは単なる選択肢にすぎない。ウィリアム・エンプソン (William Empson) は、「選択の二元性は、(中略) 存在の単一性となる」と語った。戦争は、20 世紀の出来事において中心的位置を占めている。「総力戦」に移行していく中で、戦争は近代における生活の主題として認識されるようになった。

多くの歴史家が 1914 年から 89 年までの期間を「短い 20 世紀」と呼ぶよう奨励しているがこの言葉を最初に使ったのは、マルクス主義歴史家エリック・ホブズボウム (Eric Hobsbawm) である。納得するかどうかは、ある意味、どうでもよいことである。問題は、20 世紀を生き抜いた人たちが彼らの時代の意味を意識していたということである。進歩が長く続き、さらなる前進が得られることを望んで、20 世紀が前世紀の連続であると捉えようとした文筆家もいた。その多くは発展の速さ、特に科学的発明のスピードに熱狂した。科学者たちが戦争のためにエネルギーを傾け始めてもこの傾向は変わらなかった。人々の希望はヘンリー・アダムス (Henry Adams) によって雄弁に表現されている。彼は新世紀の幕開けに際して、「1830 年、1860 年、1890 年、——X 年、そして X 年は必ず訪れる。1920 年で終わるわけではなく、無限である³」と表現している。アダムスは一種の増殖近代型エネルギー拡散の法則を提案していたが、アメリカ人が特に爽快さと感じる変化の感覚について書いていたとも言えるであろう。

他方、20 世紀が過去と決別することを期待した著述家もいた。彼らは 19 世紀の実証主義でなく、19 世紀の哲学的理想主義に啓発されていた。ヘーゲル派哲学に起源を持つ哲学的理想主義は、多くの偉大な政治的創造の中心にあった。それにはアメリカの世紀のビジョンも含まれる。20 世紀の三大政治信条である自由主義、共産主義、ファシズムは、歴史の約束を実現するために様々な場面で戦争を利用しようとしてきた。ウッドロウ・ウィルソン (Woodrow Wilson) は、1917 年にアメリカを戦争に導き、古い世界秩序とはまったく異なる新しい世界秩序を築こうとした。

さらには、20 世紀は、過去のみならずそれ自体とも断絶するという展望もあった。端的に言えば、未来はないというのである。それはすでに H・G・ウェルズ (H.G. Wells) の小説『空中戦争』(War in the Air [1908]) の中に登場していた。すなわち、「これは欧化された世界が経験したのは、ゆっくりとした衰退ではない。他の文明は揺さぶられながら、崩壊していったが、欧化された文明は、いわば吹き飛んでしまった。」吹き飛んだ世界というビジョンは、現代的な生活が脆弱で、人類の進歩が決して保証されるものではないことを示している。20 世紀の大半、人々は 21 世紀は来ないものと信じていた。

³ Henry Adams, *The Education of Henry Adams* (New York: Modern Library, 1931), p. 240.

総力戦と第一の 20 世紀

兵士の多くは、20 世紀の戦争が 1860 年以降に西洋が戦った戦争の論理的延長に過ぎないということを知って当惑した。その特徴の多くは、アメリカ南北戦争——やがて来るべき産業化された戦場の最初の暗示——で戦った将官には、なじみのあるものであった。実際、戦争における重要な技術革新の多くは、1890 年代の技術の単なる延長に過ぎなかった。内燃機関の発明、新しい動力源である電気や石油の使用、電話とテープレコーダー（現代の官僚国家の基礎）による通信革命などがそれである。1890 年代に最初の合成化学製品が生産されたことによって、ドイツ軍は 1915 年に戦場で毒ガスを使用することができた。

戦車のような例外を除いて、第一次世界大戦で使用された武器は、ヨーロッパ人たちが、アフリカやアジアの比較的非武装の社会に対して使用していたものと大差なかった。1914 年に自国を参戦させたイギリス首相の息子であるレイモンド・アスキス (Raymond Asquith) が、「戦闘は列車事故に極めて似ていて、描写困難である」と述べたのはおそらく正しかったが、西部戦線の戦場における機関銃の使用は、第一次世界大戦の戦闘の形態を描写する上で最も重要なものである。しかし、機関銃は本来、40 年前のマキシムガン（ソナム）の延長に過ぎなかった。ソナムの戦い（1916 年）とイギリス植民地戦争の最後を飾ったオムダーマンの戦い（1898 年）との唯一の違いは、同じ技術を活用するなかで、敵味方両軍ともが自分たちが事実上の無人地帯を占領しているにすぎないことに即座に気づいたことである。

犠牲者の数もそれまでに比べて特に多かったというわけではない。アメリカ南北戦争末期のウィルダネスの戦いの消耗率は高かった。陸上戦闘員全体に占める実際の犠牲者の割合は、前世紀の主な紛争と比べて第一次世界大戦が特に高かったわけではない。実際、第一次世界大戦の遙か以前から、兵士たちは自らを職業的な兵士とは見なくなっていた。兵士たちは上官の指示で動く「資産」または「資源」でしかなかった。工業的隠喩は新しいものではなかった。1914 年に戦場に送り出された軍隊は、国家の官僚制によって組み立てられ、武器を与えられ、輸送された。官僚制は、1870 年のプロイセンと同じくらい効率よく兵站問題を習得することができた。第二次世界大戦を通じて、東部戦線では兵士を前線に送る手段は鉄道であった。ヘンリー・アダムスは、アメリカ南北戦争において 1860 年代の世代が戦ったことについて、「我々は鉄道の担保だった。（中略）その世代が最もよく知っている」と書いている⁴。

⁴ Adams, p. 240.

最も重要なのは、総力戦は人間の対立の力学を変えなかったということである。ジョン・キーガン（John Keegan）は、20 世紀の戦闘の結果は遙か昔とさほど変わらなかったと書いている。それは、最終的には人的要因、つまり生存本能と道義心を調整するために苦闘する人間の行為によって決定されたのである。軍隊が堅固な前線を突破する方法には戦略的なものと技術的なものがあるが、最終的には歩兵が依然として戦車乗員や航空機パイロットより優れていた世紀には、勝敗は精神力の問題であった。勝利を敗北に、あるいは敗北を勝利に転換してしまう要素は、1870 年同様、1945 年においても作用した。戦場における軍隊の崩壊を説明する要素、すなわち不安や不確実性、誤解、一言で言えば士気の喪失は、大部分が戦闘経験のない若い徴集兵からなる野戦部隊も含めて、それまでとほぼ同じである。

原子力時代以前のエア・パワーの登場でさえ、市民および都市への直接的かつ故意による照準は、近代紛争における勝利は敵を説き伏せて降伏させる側に傾くというクラウゼヴィッツ（Clausewitz）の「中心的命題」を覆すものではなかった。このことはヒトラーのドイツ軍を除いてほとんどの戦闘員に言える。国家は敵に敗北の受け入れを納得させれば勝利する。ヘーゲルが予測したように、戦争は国家の「倫理的な健全性」の究極的な試験となった。「倫理的健全性」とは物質的関心、ひいては個人的生存よりも倫理的共同体の存続に重点を置く市民と兵士の意欲である。おおむね 19 世紀の発明である国民国家それ自体によって、国民は権力への欲望を国民自らに対して向けるようになった。戦時には、国民が自らに課した命令に従うよう教育されることによって、国民は初めて真の「国民」となった。それはソビエト共産主義の究極の名誉回復物語である大祖国戦争の偉大な成果であり、ソ連の後継国家が依然として賞賛しているものである。従って、20 世紀は 19 世紀にすでに予測されていた以上のものを達成したことになる。勝敗はもはや戦場で対峙する軍隊によって決着がつけられる技術的な問題でなく、社会全体とその暮らしぶりの生存能力について導き出された最終的な結論であった。

このことを証明するのに山口の母国、比較的若い国民国家である日本以上のものはない。早くも日露戦争（1904～5 年）時に、外国の観戦武官たちは日本の兵士が激しい砲火に襲われながら絶望的で血なまぐさい、そして、しばしば信じがたい攻撃をロシア軍陣地に対して仕掛ける非凡な勇気に胸を打たれた。軍司令官の乃木将軍は兵士の損害にあまりにもショックを受け、天皇に自決の許しを乞うている（しかし、認められなかった）。侍の倫理規定である「武士道」は、もともと中国から輸入され、中国語の「尚武」を翻訳したものである。近代的な形になったのは 19 世紀の発明であるが、20 世紀に入ると国家的性格が付与された。それがひとたびなされると、将官たちは明治以前には手にすることが不可能であった士気と物的資源を有効利用することができた。「精神」は帝政ロシアに対する日本の予測し得なかった勝利を説明する際に用いられる広く認められ

た要素なので、軍隊の指揮官は物質的なもの（技術）よりも不合理なもの（精神）を強調するようになった。1928 年に、陸軍はその主要な戦略・戦術の原理・原則を記した指導書の一つである「統帥綱領」を改訂し、「降伏」、「退却」、「防御」といった言葉を削除した。戦争を生き延びた若き特攻隊のパイロットはのちに、「最も効果的なことは武士道精神にたよることであった」と説明している⁵。不幸なことに、1945 年まで、容赦なきアメリカの予期された侵攻に対し、若いパイロットたちだけでなく、国家全体に自己犠牲の精神が要求された。

戦争と第二の 20 世紀

ノーマン・メイラー（Norman Mailer）の小説『裸者と死者』（*The Naked and the Dead*）の中で、カミングス将軍は急進的な思想を持つ若くて生意気な士官にこう語っている。「我々は歴史の停滞から抜け出した。だから、我々が運命になったわけだな。」それは 20 世紀が多くの人々に対してどういう意味を持つかという明確な説明である。多くの人々は 20 世紀が過去との決別、前世紀と連続しないものとなることを望んでいた。19 世紀には偉大な技師、鉄道工夫、造船工が存在したのに対して、20 世紀にはスターリンがかつて「人間の魂の技師」と呼んだ者が存在した。

1948 年に発表されたこのメイラーの小説は、太平洋戦争でアメリカの世紀の歩兵として戦った者の体験に基づいている。その台詞は、『タイム・ライフ』誌の編集者であったヘンリー・ルース（Henry Luce）によって戦争前夜に初めて使われた。しかし、その起源は、ジョゼフ・コンラッド（Joseph Conrad）の小説『ノストローモ』（*Nostromo* [1904]）にある。この小説の中でアメリカ人ビジネスマンが、「我々はホーン岬からスミス海峡まで、産業、貿易、法律、ジャーナリズム、芸術、政治、宗教などあらゆるものに言葉を与えなければならない。（中略）誰もそのことを実行できないだろう。我々もだ」と述べている。メイラーの小説のある場面で、カミングス将軍はアメリカの世紀が意味することや、その中で戦争の果たす役割について微細に熟考する。

潜在的な力、潜在的な資源を持つ諸国には、いわば潜在的なエネルギーが有り余っている。そして、それらを解き放ち、表現する偉大な概念がある。「運動エネルギー」として、各国は目的を持って行動している⁶。

⁵ Jonathan Lewis, *Hell in the Pacific* (London: Channel 4 Books, 2001), p. 191 からの引用。

⁶ Norman Mailer, *The Naked and the Dead* (New York: Reinhart and Co., 1948), p. 321.

カミングスが端的に言って 20 世紀最強の国家であった祖国の潜在力を引き出したのは無意味なことではなかった。1917 年以来、生産量を増加させ、敵国を打ち負かした国家である。また、20 世紀は極端にイデオロギー的な時代であり、たまたま自由主義があらゆる思想の中で最も説得力があり、最も抗い難いイデオロギーであった。「プロイセン主義」（帝制を指すウィルソンの言葉）と同様に、アメリカにとって許容し難い他の政治信条も、たとえ空洞化しているとはいえ、議会や選挙といった制度を有していた。カミングスが理解するように、国の物的、社会的資本は戦争や革命といった媒体を通じて焦点が合わされるべきである。彼は教訓として、「戦争の目的は歴史的にアメリカの潜在力を動的エネルギーに転換することであった」と結論付けている。アメリカとソビエト連邦は哲学ではないが、政治信条としてのファシズムを破壊した 1945 年以降、自らを国家ではなく、未来への約束あるいは歴史との契約と考え続けた。両国は自らを歴史を動かす力と意思を有する歴史の代理人と考えた。そして、両国は数ヶ月のうちに互いの世紀に入った。ウッドロウ・ウィルソン（Woodrow Wilson）がアメリカを第一次世界大戦に参戦させ、レーニンがロシアを同大戦の局外に立たせ、ロシア人に対する新たな戦争、900 万人の市民が犠牲となる内戦を遂行した。

三つの要素すべての観点から、総力戦によって戦争は以前にも増して「非人間的な顔」を持つようになった。戦争同様、我々の社会的営みの中に深く根付いているいかなる行為も、非人間的であるということとはできない。つまり、戦争は良かれ悪しかれ、私たちが著しく人間的にするからである。種内の暴力は人類にしか見られない。しかし、我々をそうした創造物としているのは歴史の様々な曲面で大なり小なり非人間的に活動する我々の能力である。そして、キーガンが『戦闘の顔』（*The Face of Battle* [1976]）で述べているように、総力戦の表情は特に非人間的であった。かつて世界がエネルギーの備蓄を放出する研究室となった際、強大な国家は、イデオロギー的な確信の勇気があれば、過去において人間のエネルギー放出を妨害した最も社会的な習俗や宗教的タブーを含む古い習俗のすべてを一掃することができた⁷。

個人が運命の道具にすぎなくなった 20 世紀に誠に顕著なのは、人的、社会的資本の浪費であった。このことの一つの側面はキーガンが「非個性化」と表現したことであった。無骨な言葉（彼が最初に用いた表現）であるが、その変化を跡づけるのはそれほど難しくはない。人間の体力とスタミナの限界によって規定される至近距離からの活動として始まったもの、つまり槍を投げたり矢を放ったり、白兵戦を戦ったりすることのできる距離が、かつては戦争の非人間性に折り合いをつけていた。産業化と火力の強化、そして、徴兵制によって、予備役兵を前線へ送り、戦闘に参加させることができるように

⁷ John Keegan, *The Face of Battle* (London: Pimlico, 2007).

なり、戦争のリズムは変わった。戦闘はそれ自体の機械的原動力を獲得した。兵士は「資源」となり、資源はしばしば最終的消耗に至るまで使い尽くされた。

1941 年 10 月から 42 年 4 月にかけて、700 万人の兵士がモスクワ攻略戦に投入された。ソ連軍だけで 200 万人の兵士が命を失った。ソ連軍最高司令部は戦闘でドイツ人 1 人につき 2、3 人の兵士を失うと予測していた。スターリンの浪費的な戦略はマン・パワーが尽きることのない資源であるという認識によってのみ可能となった。41 年に新兵の平均生存日数が 5 日間という部隊もあった。兵士の多くは自分用の武器を持たず、戦死した同士から武器を奪い取って戦闘に加わるよう教育された。

別のレベルで、意図的な「残虐さ」によって戦争は過去のものとは質的に大きく異なるものになったとキーガンは述べている。戦争の残虐さは、機関銃のような局地的殺人兵器の登場といった技術に内在する。少なくとも 19 世紀には最悪の兵器体系を禁止しようとする試みがあったが、1914 年以降、大方の道徳的な罪の意識がたちまち失われ、科学者たちは必要以上に残虐な兵器を生み出していった。金属の立方体を詰め込んだ地雷や、ギザギザの金属片を内蔵したクラスター爆弾がその例である。いずれの場合も、投射物の形状は平滑な金属片よりも激しく人体を引き裂き、損傷させるように考案されている。

第三に、その形態においておそらく最も破壊的な発展は、人間を戦場に留まらせるための「強制」力である。キーガンはこう述べている。一般に、総力戦は兵士に多くの方法で無理を強いる。兵士は抗議しても反撃できない強大な力による極端な公平性に恐れをなした。イギリスの詩人キース・ダグラス (Keith Douglas) は北アフリカ戦線で戦車長を務めたが、その日記に、戦争は「現実の生活とはまったく無縁」の「無声映画」のようであると書き留めている。実際の戦闘は離れたところで、機械的行われる。彼の死後、1946 年に出版された日記のページに書き留められたいくつかの言葉の中には、ほとんど個人的なエピグラムが付け加えてある。「私は月で過ごした一時期を思い出す。それは新しい次元の短い生活であった⁸。」

しかし、強制にはさらに伝統的な方法があり、それは個人の感覚をさらにいっそう脅かすものであった。イアン・カーショウ (Ian Kershaw) は、新著『終焉—ヒトラーのドイツ 1944～5 年—』(*The End: Hitler's Germany 1944-5*) で、数百万人の市民が第一次世界大戦で戦うために徴兵されたが、敵前逃亡で処刑されたのはドイツ兵士 18 人に過ぎなかったと書いている。第二次世界大戦中のドイツ国防軍は 1 万 5000 人を処刑している。それはスターリンのソ連よりも強権的であった。戦争の転換点となったスターリングラードでの 5 ヶ月間の戦闘においては 1 万 3500 人の兵士が処刑された。スタ

⁸ Keith Douglas, *Alamein to Zem Zem* (London: Faber and Faber, 1992), p. 28.

ーリングラードの戦いはもちろん同大戦中、最も厳しい戦闘であり、前線での生活を物語るいくつかの挿話を生み出した。ヴァシリー・グロスマン (Vasily Grossman) は戦闘の目撃者の一人であり、自傷した兵士を内務人民委員部 (NKVD) が射殺したことを告白している。その兵士を撃ったのち、死刑執行班は爆弾で開いた穴に遺体を埋めた。しかし、班員らはおそらく酒に酔っていたため射撃が不十分で、兵士は穴から脱け出し、自分の所属部隊に戻った。NKVD は二度目のチャンスで失敗を犯すことはなかった。

メイラーの小説に戻ると、カミングス將軍もまた革命と戦争は歴史を構築する二つの媒体であると強く主張している。しかし、レーニンは初めから革命は戦争の一形態と見ていた。レーニンが有蓋車に乗ってドイツから到着したサンクト・ペテルブルクのフィンランド駅の外に伝統的な馬の背にまたがった男の代わりにレーニンの銅像が立っていた。フィンランド駅は人がその町を訪れたり、あるいは去ったりする際に利用する五つの鉄道終着駅の一つである。共産政権時代であれば、レーニンの指が仮想の群衆を指さし、一点を見つめ、政治的な姿勢をとっているのを見たであろう。そこに戦争のために常に動員され続ける社会シンボルを見たかもしれない。ヘルマン・ヘッセ (Herman Hesse) は、「革命は戦争にすぎない。戦争同様、他の手段による政治の継続である」と述べているが、これはミシェル・フーコー (Michel Foucault) がクラウゼヴィッツを念頭に置いて、のちに政治一般に用いることになる概念である。ロシアの地方でのトロツキーの赤軍の最初の任務は農民と戦うことであった。従軍記章が発行されなかったという事実にもかかわらず、農民に対する戦争は新しい軍隊に最初の戦闘経験を与えた。

そして運命はどうであったか。ソ連がプロレタリアートの最終的な革命が永久的な平和の勝利をもたらすと標榜したとするならば、民主主義諸国も戦争を見がちであった。1945年4月11日、ルーズベルトはアメリカ国民への遺言を述べた。彼はその中で、「この戦争の終わりだけでなく、すべての戦争の終結」という独自のビジョンを提示している。東京裁判 (1946年) の戦犯28人に対する主たる罪状は、人道に対する罪 (ニュールンベルグでナチスが等しく問われた罪状) ではなく、「平和」に対する罪に荷担したというものであった。戦犯たちは宣戦布告がなされた戦争、それがなされなかった戦争の計画、準備、そして、遂行の罪で訴追され、それに基づいて処罰された。

戦争と平和の区別が不鮮明になるにつれて、ルーズベルトは20世紀の人物の中で独特の存在であった。1917年にアメリカの参戦を「平和のための十字軍」と呼んだウィルソンもまた、どこで戦争が終結し、平和が始まるのかを見極めるのは困難と思っていた。平和は戦争行為の中に包含され、新世界秩序が確立されるまで未来戦争は常に生起し得る状態であった。

ファシズムを急進的にしたもの——過去との真の決別——は、果てなき闘争を通じてアーリア人種を「目的に適合させる」ためのファシズムの苦闘であった。ナチスは平和

の価値を完全に下落させるとともに、せいぜいそれを手段として目的にかなうもの、あるいは交戦国が次の戦闘に備えて力を回復するための戦闘の合間の「戦略的休止をなすもの」と主張した。戦争は恒久的であるにせよ、そうでないにせよ、平和を産むための手段とはもはや考えられなかったが、戦争はそれ自体が存在価値を持ち、政治の究極的目標と考えられた。ヒトラーにとって、死は一つの生き方であった。

ヒトラーの敗北後、残る二つの信条体系はほどなく消耗戦に突入した。もちろん「冷戦」とは、「戦争は平和であり、平和は戦争である」という真にオーウェルの論理に根ざしていた。

アメリカが日本を原爆で攻撃する必要があったのか、将官たちはすでに降伏の準備をしていたのかといった問いについては長い歴史的な論争がある。一部の歴史家たちは、トルーマンは長崎を攻撃する際、ソ連を考慮していたとさえ主張している。それは未来への威嚇射撃であり、予測できない目的のためのものであった。小説家 E・L・ドクトロウ (E. L. Doctorow) はこう書いている。日本への爆撃はある面から言えば、『感化』であり、この爆撃の仮説上の利益はそれを命令した人間からすべてがあまりにも現実的であるといったことから生じる苦しみに対する道徳的な責任を免れさせることはできない。そうした苦痛が無意味ではなかったということを示唆するにすぎない⁹。広島が核戦争時代の幕開けを告げたならば、長崎はそれを終結させた。ドン・デリーロ (Don DeLillo) の小説『エンド・ゾーン』 (*End Zone*) の登場人物の一人はこう述べている。「長崎は戦争芸術に対する障害である。(中略) 私はそう遠くない未来に、人間らしい戦争が起きると思う。」

戦争と第三の 20 世紀

冷戦のほとんどの期間、それは知覚されなかった。実際、広島が先駆けとなったように、別の意味で、アウシュビッツは 20 世紀の最後で最大の黙示録的光景であった。それ自体、断絶をなす恐れがあったからであり、もはや 21 世紀は来ないと思われていた。実際、原爆に関して最も驚くべきことは、それが 19 世紀でなく、20 世紀の科学で生み出されたということである。原爆は当時の最先端の専門的科学であった原子物理学によって初めて可能となった。原爆は弾道学、化学、航空学といった 16 世紀の火薬「革命」の延長として見る事ができるニュートンの殺人体系を有する過去との断絶であった。広島に投下された原爆は化学物質の混合で爆発したのではない。物質の本質そのものを

⁹ David MacGregor, *Hegel and Marx after the Fall of Communism* (Cardiff: University of Wales Press, 1998), p. 30 からの引用。

人間が巧みに変化させることによって爆発したのである¹⁰。

ナチスもまたホロコーストという独自の方法で人的資源の変化を試みようとした。人間の字母から文字を奪い、様々な形態を人間的経験に下請けに出すことによって人種をより純粋なものにしようとした。戦争の恐怖は大量虐殺が軍事力の相場となったことを認識することによっていっそう増した。二つの超大国は互いを撲滅し合うことを望んでいなかったかもしれないが、戦争それ自体は生活そのもののレベルで行われていた。アーサー・ケストラー (Arthur Koestler) は、20 世紀で最も重要な日は 1945 年 8 月 6 日であるとしている。原爆が広島に投下された日である。それ以前は、人間は自分自身の個人的な死の恐怖と戦うだけでよかった。爆弾投下後、人間は人類全体の滅亡と向き合わなければならなくなった。ホロコーストも戦争であった。国家の資源が一つの民族全体を攻撃対象として動員させられた。冷戦が進展するにつれて、世界は予想される核による大量虐殺に直面することになった。もはや一民族でなく、人類全体の大量虐殺である。

あらゆるものの中で最も恐ろしいものは、クラウゼヴィッツの論理を覆した核兵器である。恐怖の均衡が最高潮に達した 1950 年代のある時期、アメリカ議会は核の応酬における降伏の見込みを検討するシンクタンクの研究への予算計上を拒んだ。ヘンリー・キッシンジャー (Henry Kissinger) は、核抑止力に関する草分け的な著書の索引に、皮肉な挿入を行っている。彼は「降伏」の語の下に、「勝利、完全な、を見よ」と書き入れている。もちろん完全な勝利は人類の滅亡を意味する。「我々は地球上にロシア人 1 人とアメリカ人 2 人がいれば核戦争に勝つことができる」と、キューバ・ミサイル危機という最大の危機の瞬間に、統合参謀本部議長パワーズ (Powers) 将軍は忠告している。このとき、その場にいた若手アナリストが当意即妙の受け答えをした。「将軍、その場合、二人の生存者は男性と女性であればいいですね。」

黙示録的でない考えはもはや頼りにならなかった。1960 年代初頭、核戦略家ハーマン・カーン (Hermann Kahn) はアメリカの大統領とその助言者たちの作戦司令室での会話を想像した。「アメリカの都市のほとんどが破壊されたら、どうやって戦争を始めようか。」助言者は答える。「絶望というわけではありません、大統領。我々にはいくつかのスペアがあります。」核戦争は従来の爆撃ができなかったこと、東京への焼夷弾攻撃やドレスデンの破壊さえできなかったことを可能にした。おそらく、世界はデザイナーが作った使い捨ての都市やスペアを持とうとするのであろう。

オーウェルの論理か。「平和は戦争であり、戦争は平和であるか。」それは武装した平

¹⁰ Brian Appleyard, *Understanding the Present: Science and the Soul of Modern Man* (London: Picador, 1992).

和であるが、一種の平和であったことに間違いはない。原爆投下のわずか数日後に、マッカーサー將軍はジャーナリスト、セオドア・ホワイト (Theodore White) にこう語っている。「ホワイト、これがどういう意味か分かるか。もう戦争は起きないのだ。」しかし、多くの代理戦争が起きた。それに続く冷戦の戦場で 5000 万人が死んだ。しかしながら、互いがいかに戦争計画を立てようとも、超大国の間での戦争は不可能であった。1989 年のゲームセットに直面しても、「平和」を勝者が努めて攻撃せず、敗者が武力に訴え得ない戦争と見るのがきっと正しい。

結論

総力戦の世紀に関して驚くべきことは、それが 19 世紀の影を引き摺っていることである。「20 世紀に (中略) 交わされたほとんどすべての思想や知識が 1914 年以前のヨーロッパで産み出され、残りは単にそれらを技術的に拡張したものにすぎないと主張してかまわないであろう」とノーマン・ストーン (Norman Stone) は述べている¹¹。「すぎない」というのは結論としてふさわしくない。1989 年に、ついに「短い 20 世紀」の幕は下りた。ドイツ人で最初にヒトラーの伝記を書いたヨアヒム・フェスト (Joachim Fest) は述べている。「東ベルリンとプラハで人々が求めていたものは、19 世紀に発明された政治体系のスペア交換であった。我々が対峙する前線、我々の理想、展望、我々の役割の理解、幽霊の理解さえも、19 世紀にその根源がある。その 19 世紀はついに終わりを迎えたのだ¹²。」この意味からすると、現代的で産業化されたものの表れである総力戦は、短い 20 世紀というよりもむしろ、長い 19 世紀の産物であった。

¹¹ Norman Stone, *Europe Transformed, 1878-1919* (London: Fontana, 1983), p. 390.

¹² *German Comments*, 19 June, 1990, p. 93 からの引用。